

子どもの食生活と躰についての総合的研究(1)

山内 昭道 茨木 竹二

A general research on the child development on eating habits
and teaching manners

Akimichi YAMANOUCHI Takeji IBARAKI

I. 本プロジェクトの基本構想とその背景

—生命維持および人間生活としての「食べること」—

人間は、生命を維持するために「食べる」ことが必要である。生命を維持するだけならば動物たちが「食べる」行為と同じである。

しかし、人間は植物や動物をただ食べればよいのに拘らず、調理があり、盛付があり、フォーク、箸があり、作法がある。なぜ、人間はこうした食の習慣が形成されてきたのであろうか。子どものしつけの中で食習慣の形成がなぜ重要なのであろうか。

これを3つの観点から問題提起をする。

1. 仏教における調理と食事作法

道元はなぜ「典座教訓」を書いたか

道元は永平寺を中心に曹洞禅を開いた禅僧として知られている。「典座教訓」は道元38歳の時に書かれたもので、寺院における食事の調理主任である典座という知事の仕事の心がまえや調理の方法について具体的に述べられている。

「わが国に仏教が伝えられてからすでに700年たっている。しかし、修行僧に供養する食物を作る作法について先人は書いていないし、教えてもない。僧の食物を僧堂へ送り出す時に香を焚き、九拝するなどの礼法は夢にも見ることがなかった。そのために食物調理や食事作法は禽獣と少しも異なるところがない。(注)」と

述べているのは、道元が日本において24歳まで比叡山や建仁寺で漢籍や大蔵經を学び、参禅修行を行っていた間、僧でない使用人の調理した食物を食べることを当然のことと考えていたことによる。

しかし、真の仏法を求めて、中国(宋)へ渡り、日本のシイタケを買いに阿育王山広利禅寺から、34.5里の道を歩いて来た老典座に会い、僧自身が調理することを知り、仏教への新しい目を開かれたことが、述べられている。

「飯を蒸す、鍋頭を自頭となし、米を淘りて水は是れ身命なりと知る」のように、「米を炊く鍋を自分の大事な頭を思い、米を洗う水は自分の尊い生命であると考えよ」と。

又「一本の野菜であっても、尊い生命体としての仏であることを自覚し、仏道を完成しようとする人々の生命を養う尊い重要な野菜として生かすことができる。典座の仕事が仏の仕事となり、生き方になる」と。

道元は調理するという仕事は、修行僧たちが仏道を成就するための食事を作ることであり、修行僧たちの食事作法も、常にこの食事の意味を心から念じながら食事することを述べ、且、永平寺において実践した。

食事を調理すること、そして食べることは人間が生きてゆく上で、極めて大切な重要なことであることを、そして、仏道に精進する上で欠くことのできないことであることを指摘したのである。

このことは、豊かな食生活に恵まれている現

代社会において、心豊かな食生活とは何か考える視点となり、原点として考えることではなからうか。

註、上田祖峯、新釈典座教訓、昭和58年、圭文社より引用した。以下引用も同じ。原文は漢文。

他に、平野正章訳、典座教訓、赴粥飯法、昭和48年、徳間書店。炭沢惟安著、典座教訓講話昭和51年、洞慶院。などがある。

知事とは、禅寺における役職をいい、6知事あり、禅寺の教育、管理運営に当り、典座は食物の購入、調理を司る役職。

2. 民族性と食文化の多様性

食事を指でつまんで食べる民族もあれば、ナイフとフォーク、スプーン、箸などの道具を使って食べる民族もある。こうした食文化の発生と、現代までの継承過程は、それぞれの民族の風土、農耕、牧畜などの生活様式に大きく影響され形成されてきたものと考えられる。

しかし、いずれにしても、それぞれに、食事の形式を習慣として形成してきたことについては変わらない。

又、本多勝一氏のカナダエスキモー、アラビアのベドウィン、ニューギニア高地人などの生活の記録から、食事の多様性が指摘されている。

エスキモーは、料理に類することは一切なく、狩猟の獲物はすべて生肉のまま食べてしまい、定まった食事時間もない。腹がへった者は子ども、大人も、自分のナイフで生肉を切り取り食べている。食卓をかこんで、2人以上で食べることはなく、一家だんらんを兼ねた食事がない。

ベドウィンも日常生活ではラクダの乳とナツメヤシの実が主要な食事なので、エスキモーに近い。しかし、去勢羊を殺して食べる時は近い親類を招待した会食がある。

ニューギニア高地人では、毎日午後1時から2時頃、畑仕事を終了すると、一家そろって石むし料理を食べる。

こうした狩猟、遊牧、農耕の民族における食

事の多様な様式の中に、食習慣の発生と、その意味を考える原点を探るべきではないだろうか。

註、本多勝一、食事と性事、昭和58年、集英社、カナダエスキモー、昭和38年、朝日新聞社、他。筑波常治、米食、肉食の文明、昭和44年、日本放送協会。原ひろ子、子どもの文化人類学、昭和54年、晶文社。今西綿司、人類の誕生、昭和43年、河出書房。

3. なぜ、幼児に食生活のしつけが必要か

本田和子氏は「吾輩は猫である」の中での3人の女の子の朝食の行動から「幼女の生における『食』の意義を娘における『結婚』のそれとの等価性」を指摘する。「幼ない人たちにとって、『食』とは『結婚』のそれに等しい外界との新たな結合であり、異性との交合に同じ異物と積極的に同化する行為であろう。彼らにとって『口』は、日常的にも、また象徴論的にも、世界に開かれた窓であり、彼らは口を通して世界とかわるのだから」と。

したがって、すさまじい苦沙弥家の3人の就学前の女の子たちの朝食風景は、娘に成長した時に、ふしだらな娘になるという予見を猫に指摘させる。

又、NHK おはよう広場の取材によって、日本の小学5年生の子どもたちの40%が朝食を子どもだけ、あるいはひとりで食事をし、10%近い子どもが朝も夜も大人不在であり、30%の子どもは、食べ盛りにもかかわらず、食事が楽しいと感じていないという。

「食欲は、人間の愛情の中で、最も基本的なこと」という指摘の中で、淋しい食事を強いられている子どもたちの現実、しつけ以前の現実を知らせている。学校の暴力や非行の原因に、家族における淋しい食事がなっていないとはいえない。

註、漱石全集第一巻、p. 399~402 岩波書店
本田和子「苦沙弥家」の子どもたち

精神の科学 5. 月報、昭和58年、岩波書店

足立己幸他 などひとりで食べるの
昭和58年NHK出版

デズモンド, モリス 藤田統訳 マンウォッ
チング 人間の行動学 昭和55年 小学館

II. 食生活問題の現代的位相（予備的考察）

1. 食生活問題の現況から

厚生省が「発ガン性食品」の規制を予告したのは、まだ数週間前のことである。数年来物議をかもしてきた食品添加物の使用¹⁾や喫煙への警告は、それらが人体にとって有害であることが科学的に解明されるにつれて、ますます強まってゆく。こうした事態を背景として現代人は病気予防、健康管理、体力増強等のために食品に対し、かつてないほど強い関心を寄せている。最近の非常な、いわゆる「自然・健康食品」ブームは、その裏返しとみることができる。現代人が食品の人体に対する影響について関心を抱く様相は、正に神経過敏とまで言っても過言ではないであろう。またそのような局面にこそ、食生活問題の現代的様相を窺うことができる。

終戦直後我国が被った深刻な食料難や栄養不良は、もはやその痕跡さえとどめていない。60年代以降の飛躍的な経済成長は、急速な技術革新と相俟って物質生活一般の高度化をもたらしたが、それはそのまま食糧・栄養事情の著しい向上として反映した。それどころか食糧の過剰供給や栄養過多²⁾が指摘される今日、現代食生活は今や未曾有の豊かさの直中にあるといえよう。とくに発展途上国のように、主に政治的動乱や食糧政策の不在から、今なお悲惨な飢餓や栄養失調に喘いでいるところがないわけではない。たしかに食糧資源の確保は、食生活にとって不変の根本要件であって、その努力は常に怠ってはならない。しかし現時点で我国は、将来を別として、ささいにその要件が満たされたものとみてよいであろう。むしろ現況において食糧供給、栄養摂取ともに量から質の次元に要件

が移行しているのであって、それはたとえば先程の「過敏なまでの食物選択」によって例証されよう。これを「食行動」として捉える³⁾ならば、その客観的要件（食物ないし栄養源）すなわち対象の次元から、主観的要件（人間）ないし主体の次元に移行しているのであって、少くとも現今の食生活問題は、基本的にこのような脈絡ないし視座において把握するのが妥当であろう。更にそこには動機づけが、病気予防であれ、健康管理であれ、いずれもフィジカルな効果に固執している点が、特徴として認められる。

ところでごく最近急に問題化している、いわゆる「神経性食欲不振症」⁴⁾は、こうした視点から注目し値する。未だ解明されていない部分が多いが、とくに思春期の女子の間で激増の兆しを見せているというこの病気は、米国で話題を呼んで以来、我国でも大きな注意が払われるようになった。その症状を要約すれば、当人には身体的に病気がないのに食欲がなくなり、それを異常とも思わず、特有の「精神症状」を示す。その症状は、自己中心的、わがまま、無反省、反抗、抑うつ、甘え、等であり、本人の病前性格は、概ね自己中心的、理想主義的であって、発病後は、その傾向を強めるとともに、禁欲主義、観念的思考、主観的主知主義的な態度になるという。その結果少食で栄養失調に陥ったり、逆に食べすぎて肥満になるケースもあり、患者には一方で母親に依存しながら、他方では反抗する、いわば矛盾した態度を示す傾向にあると言われる。更に特筆すべきことは、こうした患者の特定の家庭的背景ないし家族関係が認められるということである。

今のところ病因も不明で発病率について統計も出されていないが、やはりこの症例を食行動として観察すると、注目すべき局面が索出される。まずここでは動機づけにおいてメンタルな要素、それも主体の自我や性格が強く作用している点が明白である。しかもそれらは基本的に家庭環境において形成されることを考慮すれば、この行動の分析には家庭的要因をも加えなければ

ばならないであろう。我々は先にフィジカルな次元に触れたが、ここではメンタルな次元をも考察の中に組み入れざるをえない。したがって食行動を分析しようとする場合、とくに動機づけにおいて、フィジカルな要因とメンタルなものの、相互にインパクトを与えている点が重視されなければならないことになる。たとえばダイエットの場合、それは健康管理ないし病氣予防のための肥満防止に動機づけられることもあれば、また美容のために肥満防止を意図することもある。どちらかと言えば前者の動機づけには、フィジカルな動因が、後者にはメンタルなそれが作用していると言えようが、しかし双方ともに動機づけられる場合もありうるし、また両方が相互に、いわば「タタマエーホネ」関係にあることも考えられるのであろう。また反面、食行動が主体に及ぼすフィジカルな及びメンタルな結果についても着目されなければならない。これまではもっぱら前者に偏重しがちで、後者がなおざりにされてきた嫌いがある。しばしば犯罪者を調べた結果、本人の食生活が乱れていたり、インスタント食品を常食していたとか、というケースが判明するのである。

このように食行動におけるメンタルな次元の分析は、ますます今後重要性を帯びてくると思われる。既に述べたように、かの「食欲不振症」と患者の自我や性格との間に一定の因果関係があるとすれば、なるほど当然家庭的要因が留意されなければならない。しかし自我や性格は家庭のみならず社会的に形成されるのであり、その意味でそれらの発達心理学的分析の他に、人格形成ないし社会化にも重点が置かれなければならない。つまり食行動のメンタルな次元は、社会的な次元とオーバーラップしてくるのである。最近社会病理現象として問題視されているアルコール依存ないし中毒症や薬物中毒症には、正に社会的な要因が大きな比重を占めている⁵⁾。以上のように現代人の食行動には様々な要因が錯綜しているのであって、そこに我国食生活問題の現代的位相が看取される。

2. 近代化の進点と文化展アイデンティティーの喪失

ところで如上の現況は、むしろ国外に端を発している。食品公害を契機とした自然食の見直しや、特に肺ガン発生率と喫煙とを直結させた嫌煙権確立への要請は、より以前から欧米で高まってきた。とりわけ現今の米国西海岸では、そうした気運がますます尖鋭化している。たとえば、米国には「嫌煙条例」⁶⁾なるものを実施している州が、既に七つに及んでいるが、カリフォルニアでもサンフランシスコ市でそれが3月1日から発効し、ロスアンゼルス市など三市があとに続こうとしている。この条例の制定が住民投票に基づいていることから、そこでの住民意識が喫煙者に対する社会的蔑視につながることも十分考えられる。また今や我国でも自然・健康食品が店頭狭しと立ち並んでいるが、中にはカルフォルニアから輸入された製品が多く目立つ。それ自体当地のブームを象徴しているが、たとえば“ビタミンバイブル”と銘打ったものなど、いわば新種の現代宗教さえ想起させる。更に当地におけるアルコール依存・中毒や薬物中毒の蔓延については、今さら言及するまでもないほど広く知られている。こうした現況は、我国の「神経過敏」どころか、さながら「精神病理」の観を与えるほどであり、それは“病める大国”の症候の重さを刻印するものと言えよう。アメリカといえば、それが近代西欧文化を継受し、殊に今世紀初頭から今日まで工（産）業化の飛躍的な進展とともに最高度の物質生活に到達していることは、周知のところである。しかもその中心とも言うべきフロンティア一帯で目下こうした病理的現象が氾濫していることは、極めて意味深長である。

ところでようやく開発の途についてまもない南太平洋サモアにおける深刻な発展問題は⁷⁾、この関連から非常に関心をそそる。人口約158,000人のこの独立国では、近代文明ないし物質文化の急激かつ無秩序な流入によって、重大な生

態系の変化が生じているという。すなわちたとえば先進国が安い魚の罐詰を放出することによって、その味を覚えた島民は魚をとろうとしなくなる。またそうした流入は欲望だけを肥大化させるとともに、生活様式をも狂わせ、元来マンガ、パパイアなど豊かな食物に恵まれた島民が、今や15%も栄養失調に陥っているという。更にこの欲望の肥大化は直接青年の自我の拡大にもつながり、今なお厳然と支配するポリネシア民族特有の酋長制度と衝突し、それが「南海の楽園」のイメージとは裏腹に、猛毒の除草剤「パラクワ」による自殺の激増の背景となっているという。おそらくそこでは物質文化の流入によって精神文化、それもその民族に特有な伝統文化が駆逐されつつあると同時に、個々の島民のレベルでは、それにともなう物質的欲求としての自我の拡大が自覚されていないものと推測される。したがってそこでの栄養失調は、こうした文化変動による意識一般のカオス的狀況に起因していると見るべきであろう。

以上二事例を概括すると、そこには近代化の進展段階と食生活問題の位相との間に、一定の相関が看取されよう。一般に近代化は、工(産)業化と同義に受取られるが、根本において多層な内容を含んだ概念である。今や先進国ではすっかり定着し、また近代化政策を打出している発展途上国で受容が著しい技術革新は、近代(自然)科学に裏打ちされている意味で、本来近代西欧のみに生成した一つの物質文化ないし文明である。合理主義を基調とするこの近代文化を大別すれば、制度文化としての近代—国家・法・教育等及び、精神文化としての近代—芸術・文学・科学・哲学・思想等となろう。そこで近代化は、西欧以外ではまず近代文化一般の受容・発展として捉えるべきである。ただその受容のあり方は、実際物質文化に過重しがちなものであって、とりわけ政策的なねらいは、従来一般に工業生産の向上にあったといえよう。そしてそれには環境破壊や人体汚染等の自然・人体への悪弊、及び都市化や核家族化等の地域・家

族変動、更には自殺、犯罪、精神障害等の社会病理が付随現象として生起することが指摘される。なるほどこのような近代化の進展にともなう生態系ないし生活世界の変容には、当該地域の自然・社会・文化・歴史的諸条件によって特定の結果に拡散する局面が認められるが、しかし大枠では程度の差こそあれ、一定の共通した結果に収斂してゆく趨勢がある。つまり上記の付随現象は我国では60年代以降急激に問題化してきたが、米国や西欧では既に以前から開始されていたのである。更に近代化概念は根本において、西欧に伝統的な歴史命題を前提としている。西欧文化がギリシャ・ローマを中軸として地中海文明に淵源し、中世では特にカトリシズムに、また宗教改革を契機としてプロテスタンティズムに強く媒介されたことは、今さらあえて強調するまでもない。すなわち近代文化は、物質—非物質文化とともに本来相互媒介的な関係にあったわけである。しかし特に中世では生活世界を導いた超越的・精神的価値が、近代以後ではしだいに衰退し、代って経験的・物質的価値が台頭することとなった。つまり近代化は、基本的にこのような「聖—俗」移行の世俗化および物質化命題の脈絡で捉えられるべきである。そして西欧では産業革命の最も遅れたドイツでさえ前世紀後半から工業生産高が上昇し始め、またアメリカは今世紀の初頭で一躍世界最大の工業国に押し上がるに至った。しかし、その後の絶えざる技術革新の進展により、我国を含む先進諸国でのとりわけ第二次大戦後の生産性は、とても往時のそれと比較にならないほど著しく向上することとなった。この歴史的局面はむしろ「現代化」と定式化すべきであろうし、そこには物質文化への偏重と精神文化の混乱・衰微、現代人のレベルでは物質的利害関心への偏向と生活世界の意味拡散ないし消失が露呈しているのである。

したがって、概略であれ既述した近代化命題に立脚するならば、現代食生活問題は根本において文化問題として押えるべきである。アメリカ

カと西サモアの事例は、近代化の進展段階を座標として対照的な、つまり末期と初期のそれとして位置づけられよう。後者は物質文化が流入しはじめ、生態系の変動が顕著になりつつあると同時に既存の生活世界の意味が変容し、攪乱状態にあると見る事が出来よう。前者は、西欧文化をその精神的伝統、たとえばギリシャ・ラテン的教養やカトリシズム等とはある程度切り離されて、独特のプラグマティズムや地下資源の豊かさによって、亜種の近代文化を構築してきた。それが誇る物質文化は、今や絶頂に達しているが、生活世界が物質的次元に固定されつつあると同時に、その意味が消失しつつあるといえよう。そこで両者に共通するものは、文化の受容・発展問題である。なるほど近代物質文化は、あらゆる文化圏に普遍的に妥当する。しかしそれは西欧に独自の伝統的・精神的風土において培養されたものであって、それを無視した形で受容・発展がなされた場合、文化的歪みが生じ、概ねそれは精神文化の遅滞として現れる。これはどちらかと言えば前者に該当するが、後者にはむしろ別の局面が強調される。ここではまだ既成の伝統文化が厳然と支配しているのであって、そこに異種の物質文化が侵入すれば、社会的事実の変容とともに、必然的に基層の殊に制度、精神文化との間にきれつが生ずることになる。つまり両者ともに文化的アイデンティティー（主体）が喪失ないし拡散しつつあるのであって、それが生活世界の意味の消失ないし混迷として現れていると考えられるのである。更にそれは個々人にも日常的な生活行動において、また「文化的反映」としての自我や人格の形成に微妙に作用することとなる。かの西サモアにおける「栄養失調」や「自殺の激増」によらず、米国西海岸の言わば「(飲)食行動における精神病理」は、こうした関連を傍証するものといえよう。とりわけ後者には、食生活問題の現代的位相が集約されているが、それによらず先進国一般に認められる食行動の動機づけにおける、「物質的代謝」への固執ないし“とらわ

れ”は、「食べること」の意味喪失に起因している。現代人にはますます物質的に「手段化」する嫌いがあるが、それには本来「それ自体」として感性的効果がそなわっている。だからこそ伝統的な食習慣には精神的意義が付与され、それを根拠とした「簇」が自我形成に重大な役割を果たしていたものと考えられる。たとえば我国で最近盛んに話題となっている「給食制度の見直し」や「先割れスプーン」をめぐる論議では、やはり食行動を代謝手段とする論点の域を脱していず、少くともまず「食べること」の“人間的意義”を根源的に問い直そうとする向きはあまり見られない。周知の如く我国の近代化は明治維新以後国策として開始されたが、その進展段階は米国に接近しつつあるものと見做してよいであろうし、また食生活問題の位相についても同様である。しかしその受容理念が「和魂洋才」であったとすれば、やはり「文化的アイデンティティー」の喪失を他人事とは言えないし、食生活問題の現況にもそれが具現しているものと見るべきである。その解決にむけてさしあたり不可欠な作業は、我々が「食べること」の伝統的な意義を、その始源にさかのぼって比較文化の視座から解明することである。換言すればそれは一つの「文化的自己理解」であるとともに、また近・現代文化の相対化でもある。なるほど我々は過去に生きることは出来ない。しかしこうした試みなしで、我々の文化的アイデンティティーを確立することは不可能であろう。

III. 仮説的展望と課題追究の手順

以上の所論から明らかなように本研究プロジェクトの中心課題は、「我国における伝統的食文化の根本的な意義とその変容過程を解明すること」にある。したがってあらかじめ一定の仮説的展望に基づいて、課題研究の手順が用意されなければならない。とはいえその際現実的な制約諸条件を考慮しながら、最も有効な方法が案出されるべきことは言うまでもない。そこで

まず伝統的食文化を把握することが必要となるが、それには近代化進展以前の食習慣における食形態を類型化するとともに、食物史的に押えることが必須である(A)。さいわいこうした関連では特に民俗学が既に多く成果を上げているので、それらに依拠することが出来る。しかもそこで類型化が準じついるハレ(・ケガレ)とケのカテゴリーは、食文化の意義や形成過程を明らかにする上で重視されなければならない。ハレの食事は、祝儀(・不祝儀)の、つまり非日常的なそれである。祭礼や通過儀礼に代表されるハレは、本来年間を通じて共同体の暦の中で繁忙期と休閑期との兼合いで、ケと調子良く割り当てられていたし、またそれ自体が当該生活世界の意味でもあった。そのようにハレは共同体祭祀を中心とした宗教(・呪術)的儀礼に由来し、その際の(飲)食事は言わば儀礼的手段としての宗教的行為であったといえよう。したがってそれに供与される食形態の所以は、まず宗教的意味や儀礼から演繹されるべきであり(B)、その点には主に宗教史的視野が要求される。たとえば、出雲大社龍蛇神の御礼には御神体として、三方の上でとぐろを巻いている蛇が描かれているが、一般にそれが御供え餅の原型とされているのである。おそらく帰依者には、その供物が、御神体の「化体」であり、それを食べることは御神体との「霊的交わり」につながるとともに、その御利益に与かりうると受取られたに相違ない。また供儀としての陶醉手段には、たいていアルコールやタバコ等が用いられたが、それも一つの「霊的交わり」につながるとともに、日常的世界からの解放感をもたらすものでもあったと思われる。したがってこのように食文化は、根本的に宗教的意味や儀礼によっても規定されているのであり、ハレの食形態はこの関連で捉えられるべきである。

しかし他方ケの食形態には、むしろ現実的な制約条件(C)が介入している。たとえば食物については、当該共同体の生産・交換の他にその貯蔵・加工方法にも左右されようし、食事の形

式や内容は、氏族組織・家族の形態や、その階級・身分関係にも依存するであろう。その意味で食文化は、自然的要因と並んで共同体の諸要因によっても規定されるのであり、それには社会・経済・政治・技術的分析もおざりに出来ない。したがって食文化を類型化し、その伝統的な意義を問うには、少くとも如上の(A)、(B)、(C)、が主要なポイントとして重視されなければならない。しかもそれらは、(A)食形態が(B)宗教的意味と(C)現実的諸条件との力学的規定関係にあり、しかも動態的にはどちらかと言って、(C)への漸次の移行と見るべきであろう。何故ならば宗教的儀礼は一般に日常化し、それにともなってハレの食事でもまたしだいに宗教的意味を弱め、ケのそれと融合してくる趨勢にあるからである。そこで食形態は、ますます共同体の現実的諸条件によって強く制約されることになるわけであるが、逆に見れば、それにつれて食形態には、共同体の理念や規範・制度が強く影響することになる。すなわち食文化の意義には、共同体意識がより濃厚に抽象化されるのである。とすれば たとえばかの「霊的交わり」も、ここではむしろ共同体や氏族・家族の「一体感」ないし「帰属意識、つまり構成員相互の「感情融合」や「意志疎通」に転化してくることが考えられる。したがって以上の素描から仮定出来ることは、食文化の伝統的意義が正にこのような局面に求められることである。またそれを前提とした食行動は、単なる物質・生理活動にとどまらず、意識・感性活動であることが強調されねばならない。更にそうした食文化は特に子供の躰を通じて世代から世代へと継承されてきたのであって、それは必然的に自己意識ないし共同体意識を培養するとともに、共同体を担うべき一員としての自我形成や社会化に大きく寄与したに相違ない。

ところでこうした仮定を吟味してゆくには、どこにその端緒を見出しうるであろうか。なるほど本研究には、先の(A)、(B)、(C)の如く多面的な視角が求められてはいる。しかし追求

されるべき課題は、あくまで生活文化としての食文化であることが顧慮されるべきである。そしてその伝統的意義が、意識の反映として捉えられる以上、これはまた一つの「人間学」とならざるをえない。そこでそれらの条件を満たすには、文化人類学の総合的な視座が最も適合している。この領域にも最近では専門化の傾向がみられるが、その点からすれば本研究には宗教人類学が適しているし、またそれ以上にいわゆる「象徴人類学」の提唱⁹⁾が有効である。一口で言えばそこでは宗教的儀礼や習俗が宗教的意味の象徴として理解されているのであって、それに準じてまた膳を食習慣の象徴と見做すことも可能であろう。したがってこうした視点のフィールドワークが不可欠であり、また本プロジェクトの中核となる諸概念の規定や例示にも文化人類学は、適切な視点を持合せていることになる。しかし現地踏査となると、言うまでもなく多くの現実的諸条件によって制約されるため、本研究も事例研究の形式をとらざるをえない。それを度外視してもさいわいなことに、埼玉県秩父地方は依然としてこの種の対象地として恰好な条件を具備している。浦山郷は未だ民俗学の豊庫とされているし、他にも秩父郡には食習慣が年中行事の中で継続されている。とりわけ小鹿野町河原沢では、「道陸神焼」(1月15日、橋詰)や「おひなげえ」(4月3日、日影)の子供の年中行事が続けられているし、同様に大人の行事としては「お日待ち」(原)が残っている。更に子供の行事として吉田町上吉田塚越では、「米山薬師花まつり」(5月8日)が行われるし、荒川村白久の猪鼻熊野神社では「甘酒かけ祭り」(7月25日)も行われる。したがってこれらにはすべて特定の食形態がともなっていることから、そこに食習慣を象徴する膳の、何らかの意義ないし根拠を見い出すことが、さしあたり重要な作業となる。

註

- 1) ごく最近では、『〈食べ物と文明〉食品添加物を考える』(岩波ブックレット No. 28, 1984

年)特に6, 7ページ参照。

- 2) たとえば西川潤『食糧—21世紀の地球』(岩波ブックレットNo. 27, 1983年)56~65ページ
6. 「飽食文化と私たちの生活」参照。
- 3) こうした視点を基調にした研究として、とりわけ『岩波講座 精神の科学』5. 食・性・精神(岩波書店, 1983年)が注目される。
- 4) 同上75~87ページ, 野上芳美Ⅱ「やせと肥満」, 『現代のエスプリ 食・性・こころ』No. 197(至文堂, 1983年)74~98ページ, 池田友信他「思春期女子の食欲異常と疾病」, 同上126~137ページ, 金子寿子「カウンセリングをとおした神経性食欲不振症患者および親への援助」等を参照。ここでは、小林司「食欲不振症激増の兆し—学校も心の健康注意を—」(『読売新聞』, 昭和59年(1984年)2月15日)に負っている。
- 5) たとえば齊藤, 柳田, 島田編『アルコール依存症』(有斐閣, 1980年)や、大橋薫編『アルコール依存の社会病理』(星和書店, 1983年)参照。
- 6) 「“嫌煙先進国”は今」(『読売新聞』夕刊昭和59年(1984年)3月6日)
- 7) 「「楽園の自殺」に胸を痛める」(『朝日新聞』, 昭和58年(1983年)9月13日)。
- 8) 青木保編『現代の人類学, 象徴人類学』(至文堂, 昭和59年3月)及び『理想, 特集=「和」の最前線』No. 608(理想社, 1984年1月)200~214ページ, 吉田禎吾「儀礼の象徴論的解釈について, 象徴人類学再考」を参照。
- 9) (プロジェクト・メンバー)
 - 〈共同体・宗教〉
 - 山内昭道 茨木竹二 村木由紀子
 - 〈食形態〉
 - 前田慎一 千田真紀子 猪俣美知子 野崎千穂子
 - 〈膳〉
 - 川合貞子 武石仁美 福田啓子 斎藤尚子